基礎から学ぶ楽しい学会発表・論文執筆

中村好一　著

＜書評者＞　川村　孝　（京都大学健康科学センター長・教授）

前著に続いて楽しい本である。本文を補足する記述はすべて脚注もしくはコラムの形になっている。この付随的な記事がないページはほとんどなく，多いところではページの半分を超える。その分，本文は本筋のみで構成され，見出しの適切さもあって論旨は大変明快である。このような構成をとっているため，著者は安心して脱線ができるのである（著者の中村氏は名だたる鉄道マニアなので「脱線」という言葉は嫌うだろうが）。

楽しい本だが，内容は大まじめである。アカデミアの世界で求められる考え方のイロハから説き起こし，CONSORT や STROBE など国際的な指針，倫理問題や著作権にも言及している。さらにエディター経験を生かし，図表やスライドの作り方から一文の長さに至るまで，ほぼ余すところなく記載されている。学会発表や論文執筆の初学者は，本書を（もちろん脚注でなく本文を）丁寧に読み込んで実践すれば，かなりの水準に達することが期待できる。すでにある程度の経験を持っている方々には，弱点補強のよい指南書となろう。

人に科学的なメッセージを伝えるときは，まずは一定のお作法に従った方がよい。本書以前の問題であるが，日本人は論理的に語ることがあまり得意でないように評者は感じている。小学校の作文で「思ったとおり書きなさい」と言われたからだろうか。しかし，お作法に従うことによって論理に流れができ，メッセージが読者の頭にスーッと入っていく。その一つが論理の一塊をなす「パラグラフ」を重視した書き方（パラグラフ・ライティング）である。パラグラフの冒頭の一文でそのパラグラフの主題を示し（トピック・センテンス），パラグラフの末尾の一文でそのパラグラフを締めくくる（コンクルージョン・センテンス），という枠構造をとる。論文の緒言や考察ではこの書き方（というより考え方）は特に重要である。思ったとおり書いてよいというのは，その先の話である。

本書に戻って……。著者は今や日本の疫学界の重鎮になっているが，本当は人なつこく親切な人である。その人柄が随所に出ていて，記述は実に懇切丁寧である。ノウハウを解説した本なのだが，世界に通じる科学コミュニケーションについて考えさせられる 1 冊でもある。

なお，奥付に著者の近影が出ているが，著者が後ろ向きに写っている本に初めて出会った。彼は決してバックシャン※ではない。後ろ姿でモノを語れる稀有な人なのである。

※後ろ姿の美しい女性。特に，後ろ姿だけが美しい女性を俗にいう語。

●A5　頁 240　2013 年
定価：本体 2,800 円＋税
［ISBN978-4-260-01797-8］
医学書院

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2014

2026/10/15 01:24:58